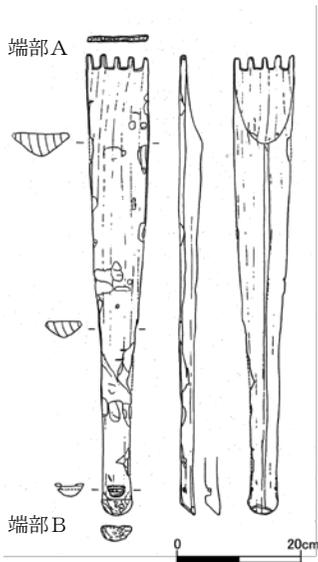


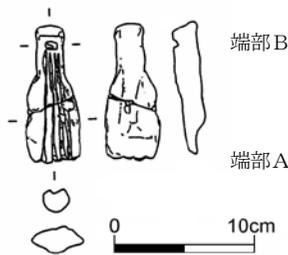
1 「槽作り・箱作りの琴」 静岡市登呂遺跡・平成12年度調査 弥生後期 (静岡市教育委員会 2005 を改変)
 2 「板作りの琴」 静岡市小黒遺跡 古墳初頭 (笠原 2006、静岡市提供)

図3 「琴」

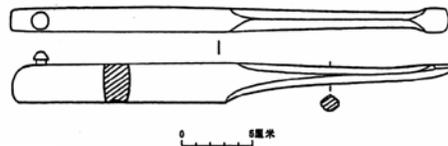


滋賀県古高・経田遺跡 古墳前期末 (森山編 2005)

図4 筑形木製品



静岡県 明ヶ島5号墳下層出土
 (磐田市埋蔵文化財センター編 2003)
 図5 筑形木製品を模造した土製品



中国湖南省 馬王堆三号漢墓 (湖南省博物館・湖南省文物考古研究所 2004)

図6 名器「筑」

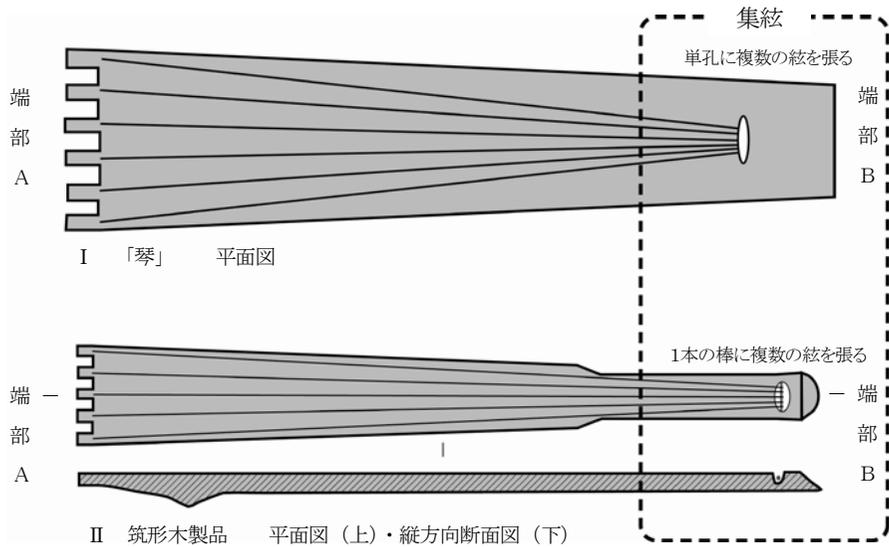


図7 「琴」および筑形木製品における張絃方法の推定模式図（筆者作図）
（この模式図は突起1本に1絃を張ると仮定した場合を示す）

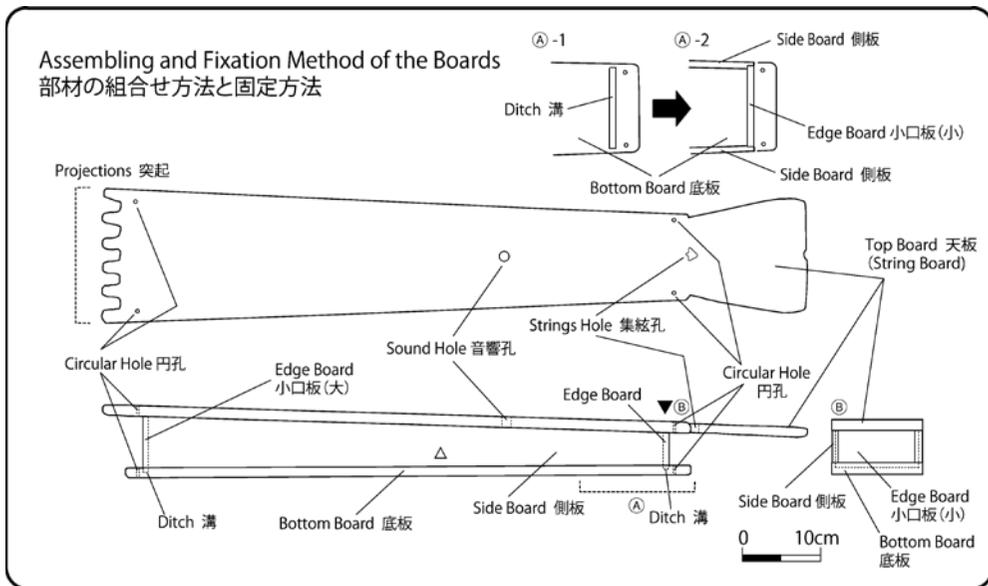
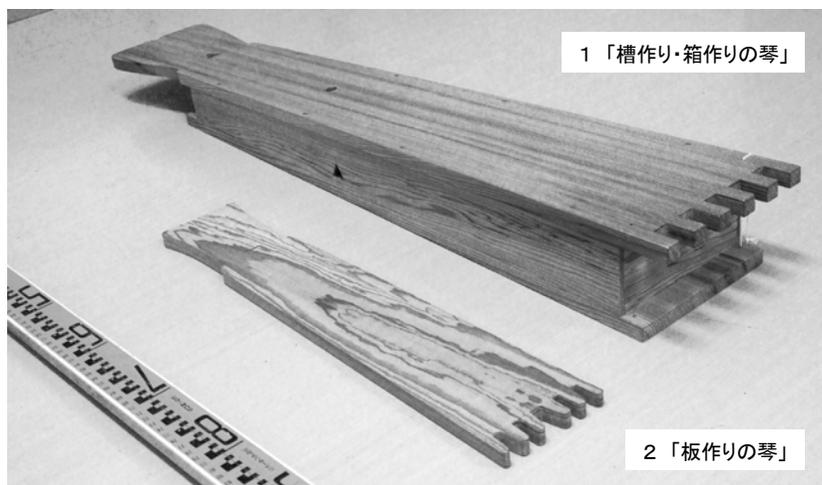


図8 静岡市登呂遺跡・平成12年度調査出土「琴」（図3の1）の復元図（筆者作図）



1 図3の1および図8の復元品 2 図3の2の復元品
 図9 実寸大による製作技術・全体構造の復元的検討（筆者撮影）

謝辞

出土「琴」の実見・写真撮影にあたり、静岡市文化財課、静岡市埋蔵文化財センター、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所の諸機関に大変お世話になりました。ポスター発表で紹介した復元「琴」の製作にあたっては、工房「WOOD LANDER'S 木那」の片岡祥光氏（置戸町）にご尽力をいただきました。小坂みゆき氏（北海道大学大学院）には天津への出発に際してさまざまな情報提供をいただきました。発表原稿の外国語校閲ではラファエル・アバ氏（元・北海道大学大学院専門研究員）に大変お世話になりました。末筆ながら深く感謝申し上げます。

本研究は、文部科学省科学研究費補助金若手研究(B)（課題番号 21720281）の成果の一部である。

註

- 1 図1に示すポスターは、<http://musicarchaeology.tjcm.edu.cn/index.asp>より掲載した。
- 2 本稿では、考古資料において「音」を発するための道具を「音響発生器具」と呼んでいる。「楽器」という用語を広義に捉えて呼称することもできるが、「音響発生器具」という用語を設定する理由について、筆者は既出の論考（荒山 2008a:44）に次のように記している。「我々が「楽器」と呼ぶ概念として、無意識的にも「音楽」を奏するための道具という認識を持ち合わせやすい。人類史において、文化的規範によって「音」を操作し、歴史的に達成してゆく過程を明らかにしようとするならば、文化制度化された「音楽」や「楽器」を前提とする枠組みから放れ、より客観的かつ包括的な枠組みの中で問うてみることも必要である。」
- 3 このような観点から、本稿において、絃の振動によって発音される音響発生器具を、「絃鳴系音響発生器具」と呼んでいる。
- 4 本稿で使用している「絃」の字について、現在では楽器に張られた糸を「弦」と表記し、その弦を張って弾く楽器のことを「弦楽器」と表記することが一般的である。ただし、本来的には「弦」ではなく「絃」という表記が歴史的に慣用されており、本稿では「絃」の表記を用いる。
- 5 本稿では、「復原」と「復元」を使い分けて記載する。「復原的研究」とは、想像的・外観的な再現をおこなうのではなく、当時の製作技術や製作工程、使用方法・使用技術、音響の認識を再構成するための研究を指す。また、復原的な推定をおこなう上で製作し再現することを「復元製作」と呼ぶ。
- 6 「琴」が指す絃鳴系音響発生器具の範疇はその時代によってさまざまである。現在では、琴柱を用いる「箏」を指して「琴」（コト）と呼ばれることが一般的である。また、「琴」をキンと呼ぶ場合は、琴柱を用いないものを指す。本稿においてカギ括弧付きにより表記する出土「琴」（コト）は、絃を張るための長胴な板をもつ絃鳴系音響発生器具を指し、その大半は片方の端部に突起が作られている。端部に突起が認められる点は「和琴」に共通する特徴である。和琴では片方の端部に6本の突起をもち6本の絃を張る。「和琴」は現在も使用されているが、箏のように身近な和楽器として日常的に奏でられるものではなく、皇室をはじめ特別な伝統儀式を継承している神社で行われる御神楽（みかぐら）などに使

用されている。

6 註4を参照。

7 筑形木製品の位置付けに関しては、「板作りの琴」の中に位置づける見方もある（水野 1980、上原 1993 など）。先行研究では、類例の増加と共に形態的特徴や想定される奏法が「琴」とは異なる点が指摘されるようになり、別種とする見解が提示されるようになる（笠原 1999 ほか）。筆者も筑形木製品の個別研究を実施しており、それを受けて本文中に挙げた理由から別種であると考え（荒山 2005）。

8 突起側の絃の固定方法については、和琴のように突起に 1 絃ずつ固定したことが想定されるが、和琴にみられるような突起に固定するための穿孔はみられない。弾琴埴輪や土製模造品にデフォルメされた絃表現から、突起間に絃を張った可能性もある。

9 第3章5節について、発表時にはこれらの内容に図版を添えて説明をおこなったが、本紙では頁数の都合により割愛した。刊行予定である論集（議事録）には、これらの内容に図版を添えた原稿を提出している。合わせて参照されたい。

引用・参考文献

Arayama, Chie

2010a “Restoration Research of Stringed Instruments Excavated in Japan”. *Abstracts of the poster contributions presented at the 7th International Symposium of the Study Group on Music Archaeology (ISGMA)*, 中国天津音楽学院, Tianjin, China, p.38.

2010b “Excavated Stringed Instruments in Japan; Various Aspects of the Stringed Instruments in the Yayoi and Kofun Periods”. *Abstracts of the paper presented at the 7th International Symposium of the Study Group on Music Archaeology (ISGMA)*, 中国天津音楽学院, Tianjin, China, p.21.

2010c “Continuity and Discontinuity of Musical Instruments or Sound Producing Devices in Japan; Based on Music Archaeology and Historical Ethnomusicology”. *Studien zur Musikarchäologie VII. Orient-Archäologie 25*, pp.47-58, Rahden/Westf.:Leidorf. Germany.

荒山千恵

2005 「筑形木製品の研究」『研究論集』北海道大学大学院文学研究科、5号、99-121頁

2007 「篋形木製品について」『北海道考古学』北海道考古学会、第43輯、97-112頁

2008a 「人類史における「音」の文化制度化の研究—日本列島出土の音響発生器具を対象にして」『北海道民族学』北海道民族学会、第4号、44-52頁

2008b 「人類史における「音」の文化の考古学的研究—日本列島から出土した音響発生器具を対象として」2007年度博士論文、北海道大学大学院文学研究科

2009 「国際音楽考古学会 (ISGMA) 第6回シンポジウムと「音楽考古学」—日本列島から出土した音響発生器具の考古学的研究の発表を通して—」『北海道民族学』北海道民族学会、第5号、15-24頁

Ishimori, Akira

2010 “Why did Ancient Japanese Control the Development of Musical Instruments? Application of Brain Science”. *Abstracts of the paper presented at the 7th International Symposium of the Study Group on Music Archaeology (ISGMA)*, 中国天津音楽学院, Tianjin, China, p.19.

上原真人

1993 「J 楽器」『木器集成図録』近畿原始篇 奈良文化財研究所

磐田市埋蔵文化財センター編

2003 『東部土地区画整理事業値内埋蔵文化財発掘調査報告書』磐田市教育委員会

笠原潔（静岡市教育委員会編）

1999 「出土琴の研究」(3)『放送大学研究年報』第16号、177-194頁

2006 「登呂遺跡出土の琴、ならびに関係出土品について」『特別史跡登呂遺跡再発掘調査報告書』（自然科学分析・総括編）、139-147頁

吉川英史監

1992 『図説 日本の楽器』東京書籍

湖南省博物館・湖南省文物考古研究所

2004 『長沙馬王堆二、三号墓』文物出版社

静岡市教育委員会編

2005・2006 『特別史跡登呂遺跡再発掘調査報告書』（考古学調査編）・（自然科学分析・総括編）

平田勉

2002 「C 箏の歴史と構造」『邦楽箏始め』カワイ出版 37-45 頁

水野正好

1980 「琴の誕生とその世界」『考古学雑誌』第66巻 第1号、1-25 頁

森山宗保編

2005 『古高・経田遺跡発掘調査概要報告書』守山市教育委員会

(あらかやま・ちえ／北海道大学埋蔵文化財調査室)